

続縄文文化の折り重なった集落址 —K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点の発掘から—

本格的な^{すいとう}水稻耕作や、高床倉庫での米穀の貯蔵がおこなわれた弥生文化と同じ頃、北海道ではエゾジカ・サケを捕って暮らしていた続縄文文化前葉の遺跡が地層中に残されていました。構内では、人文・社会科学総合教育研究棟（W棟）を建てる際におこなわれた発掘調査で、小河川沿いの微高地に残されていた、今から約二千年前の集落址がいくつかの地層から折り重なって発見されています。

K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点の発掘調査では、調査範囲内からサクシュコトニ川に隣接した微高地上で居住場所や食糧加工作業場所などが確認されました。現地表下約4mの深さまでおこなわれた発掘調査では、生活址が残された地層が5つみつき、続縄文文化前葉の^{たてあな}竪穴住居址（合計12基）や、屋外炉址（百数十基）が確認されました。竪穴住居址は2番目の地層で3基、3番目の地層では2基、4番目の地層層では7基が存在し、各竪穴住居址では竪穴中央に火を使った炉址があり、この炉址

内から焼けたサケやエゾジカの骨がみついています。また、屋外で使われた炉址からは、^{たき}焚き火をおこなった際の灰とともに、砕けたサケの骨が焼けた状態でみついています。

竪穴住居址が残された3つの地層の間には、^{ぼんらん}河川の氾濫によってもたらされた砂層やシルト層が幾重にも^{たいせき}堆積していました。幾重にも堆積した砂層やシルト層が数cm～10数cmの厚さであったことから、続縄文文化前葉の人たちが、河川に隣接した同じ場所で、断続的に竪穴住居を作った結果、^{ちようふく}重複する集落址が残されたと考えられます。

また、集落址からは、弓矢の先端に装着する^{せきぞく}石鏃が数百点出土し、加えて、割られたオニグルミの破片が多量に発見されています。続縄文文化の人たちはシカなどを対象とした弓矢猟の準備やオニグルミの実に代表される植物質食料の利用も集落内でおこなっていたと推定されます。



集落を構成する一つの竪穴住居址



遺跡から発掘された動物の骨
左2点はエゾジカの下顎骨，右はサケ科の顎骨

(埋蔵文化財調査室)